
憧れと友情

蒼幻α

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憧れと友情

【Nコード】

N0938U

【作者名】

蒼幻α

【あらすじ】

騎士様に憧れる女の子が、幼馴染の男の子の良いところを発見するお話(?)、児童文学というか、なんか一説には、少女小説になってるみたいです(汗)

？

祭典が開かれていた。

現国王が戴冠されて二十年目を迎える節目の祭典である。

「末永く王国の栄えのあらんことを！」と民衆は合言葉のように言葉を投げかけ、通りには熱気が立罩めていた。

その集団のなかにひとりの少女があった。

名をカレン。今年十七の少女である。

人々は熱くなって声を張っている。カレンにはどうして人々がそんなにも大きな声を出して熱くなっているのか、わかりかねるところがあった。が、そんなそぶりは表に見せない。夜の眠りのようにひっそりと、息をひそめて、頭だけだして気配を探るような具合に、彼女は辺りの様子を見守った。それは目当ての瞬間が来ることを狙っての、狩猟民族のような注意の払い方である。

パレードの集団が過ぎ、やがて、各国から献上された祝いの品が運ばれてくる。カレンの目当ては、その品を守っている護衛の兵士であった。兵士と云っても下っ端ではない。各地で果敢な働きを見せる国王直属の騎士団である。ふだん着ている装備よりも数段優れた、ぴかぴかの鎧を着ている。日射しをきらきらと反射していて、見るからに堂々としている。

カレンはそのうちのひとり、二十歳、現在独身のレイトに思いを寄せていた。レイトはもともとこの街の、特に、カレンが住んでいる地区に生まれた人物で、子供の頃から優しく、美しく、また義侠心に溢れた人物で、自然と彼女の憧れの人物になっていたのである。カレンはひとり部屋にいたとき、いつもレイトのことを考えていた。憧れは魂を焦がし、いつになれば思いを打ち明けるチャンスが巡っ

てくるだろうと、その日を待ち続けていた。が、そんなチャンスが訪れる見込みは、まったく立たなかった。

カレンはパレードの行進に目を据えた。

目当てのレイトがいつ現われても良いように、心の準備を整える。「末永く王国の栄えのあらんことを！」とまた民衆が声をあげている。一堂の熱気は最高潮にまで高まり、その大きな波が去ると、カレンはすぐそこに国々の献上品が運ばれてくるのを見た。

丁度それを守るようにつかずはなれずしているレイトの姿が、カレンの目に映った。

レイトは他の兵士と同じように、真新しい装備に身を包んでいた。銀色に光るその鎧は、職人がいま丁度磨き上げたかのように傷一つなくくつきりとなめらかな陽光をかえして、人々の目を射ている。もちろん、それはレイトの本意ではないのだろうけれど、そのまばゆさがまた、国王直属の騎士団のメンバーであることを、何か神格を得たような、特殊の人物であることを示しているようだった。

カレンは普段は見ることでできないレイトの姿を見られたただけで満足した。それは一種、ストイックな感情の賜物のようでもある。

——わたしは本当にレイトのことが好きなんだな……。

彼女はそんなことを思っ顔をほころばせる。

行進は続いていたが、カレンはそれ以上、見るべきものもなくなつて、ゆっくりとその場を離れた。心がほーっとあたたかくなっていた。

見ると、他の数人の街の娘も、騎士団の行進が終つたのを観て、その場を去ろうとしていた。

この中の何人がライバルなんだろうとカレンは考える。そのほかの人々はなおも行列に自分の感情を仮託するように、そこにのめりこんでいる。

「末永く王国の栄えのあらんことを！」

声は続いている。

なにか宗教じみてるとカレンは考える。

彼女は肩をすくめてその場を立ち去ろうとする。しかし、同じように立ち去ろうとする娘たちの集団にまじるのは勘弁願いたくて、もう少しだけ人々の列に留まることに決めた。行進はさらに続いている。最後の方は観たことのない大きな獣の背に乗って進む列もあった。そこについているのは動物使いの面々で、怪しい雰囲気が漂っていたが、かれらがいなくては獣が暴れたときになだめるものがないのだろうと容易に想像できた。

カレンはその獣の姿を観て驚かされた。獣は温厚そうで動きも鈍重だったから、指示するのはさほど困難でなさそうであるが、それでも、その巨体は、大人十数人分くらいは軽くありそうで、人々が話すのを聴いてみると、どうやらそれは「エレファント」というものであるらしかった。この街の人間で、このエレファントを見た者は少ないらしく、ほとんど全員が、感嘆の溜息を洩らしながら、その獣の進むのを見守っていた。

カレンはその獣の姿を見終えてから、列を出ることにした。と、その彼女の動きに熱っぽい視線を加える少年があった。

カレンはそれに気づかない。ゆっくりと屋台のある方へ歩いて行く。彼女は焼き菓子を買うことに決めた。パンケーキのような生地を一口サイズに焼いた一種のカステラ状の食べ物だった。カレンは銅貨一枚を払って、その焼き菓子を六個購入する。

家に帰ってから食べようと決めている。彼女はうきうきと歩みを進めながら、しかし、自分のなかに大きな喪失感があるのを感じていた。もしレイトと話すことができたなら、どんなに幸せだろう。それができないのは分かっているけれど、あまりに悲しい。

「カレン！」 ゆっくりと歩みを進める彼女の背後から、先の少年が声を掛けた。

「うん？」 カレンは後ろを振り向く。

そこにはちよつとはしこそうな、しかし若干臆病そうな、眉の奇妙にゆがんだ少年の姿があった。カレンは「ああ、ユース」と気のないそぶりを見せる。

「ちょっといいか」ユースは思いきって切りこんだ。

「いいけど、なに？ あたし、急いでるんだけど……」

ユースは、うっ、とうなった。

カレンはユースの姿をあらためて眺める。

ひよろつとした体格は均整のとれたレイトとも、頑丈な体躯のトバとも異なり、なにか心細い、吹けば飛んで行ってしまいそうな弱々しさを感じさせる。肩幅はせまく、それは幼いころから、あまり身体を鍛えることをしてこなかったせいだろうと感ぜられ、いまからどんなに訓練したとしても、レイトは勿論、トバのような体躯になることは無理だろうと思える。

カレンにはこの少年を侮る気持ちがあつた。

いつも調子外れなことしかなくて、要領が悪いイメージがあるのだ。いつも損を見る性格と云うが正しいかもしれない。

「あなたがあたしに何の用があるっていうの？」カレンはずいっと前に出て訊ねた。

「あっ、——うう」ユースはひるんでしまった。

「何なの？」カレンはいらいらした。

「あの、ちょっと付き合ってほしいんだけど」

ユースはカレンに訊ねた。

カレンはその申し出にどう答えたものか一瞬悩んだ。もしここで気のあるそぶりを見せれば、きっとユースは誤解するだろうし、誤解されては本当に好きなレイトのことを打ち明けたとき、ユースはとてもショックを受けるだろう。ここは断った方がいいんじゃないか、とカレンは思いつつ、しかし、と考える。

もしユースがそんなことをまるつきり考えてなくて、ただ単にあたしを遊びに誘っているだけだったとしたら、ここで断るのは不粹かもしれない。それに、断ったことで恨みを持たれることもありえる。

「どうかな？」ユースはおそろおそろカレンの返答を待った。

「なにか裏の気持ちがあるとか、そういうのはない？」カレンは慎

重に訊ねた。

「裏？　なんだよ、それ」ユースはぶっきらぼうに云う。

「ううん、ないんだったら、いいの。うん、わかった。なら、ちょっと待って、これ置いて来るから……」カレンは菓子に入った紙袋を見せてほほ笑んだ。

ユースは一度呼吸を整えた。

何か思いつめていた気持ちが解き放たれたようになって、ほっと一安心したという様子だった。

「おい、ユース、カレンを連れだして何しようってんだ？」

そのとき第三の人物が現われた。それはトバだった。

「トバ……」ユースは弱々しい声をあげる。

これよ、これ、この声があたしは好きじゃないのよね……カレンはユースの臆病声にそう思いながら、第三の人物であるトバに視線を向けた。

？

あきらかにユースの態度が落ちつかなかった。

「ユース……」とカレンは声をかけたが、ユースは表情をこわばらせ、また、肩や背中を震わせていた。それは怒りによるものであるか、戸惑い、あるいは恐怖のためであるかはわからなかった。が、この場にトバが現われたことが、その原因の一翼を担っていることは確かなようだ。トバは挑戦的な顔つきで、ユースとカレンの顔を交互に見た。

「おまえら、そういう仲だったのか？」トバはぶっきらぼうに云う。しかし、その表情の奥には、なにか熱い感情の流れがあるようだった。

「そんなんじゃないわ。だって、あたしは――」

カレンは叫んだ。自分にはレイトがいる。そう宣言してしまいた

かった。が、レイトは城と任務地の往復で、余暇などれない状況であったし、たとえとれたとしても、自分のようなものと一緒に時間を過ごしてくれることは万に一つもなからう。それなら、そんなことを云って波風を立てるより、大人しくしていた方がいい。カレンが黙っていると、トバはさらに付け加えた。

「ユースみたいなやつと一緒にになったら、苦労するぜ？」

「いったい、何が云いたいの？」カレンはきっぱりと云った。

その言葉にトバはむきになったようだった。

かれは顔を紅潮させ、歯ぎしりをし、そして恨みを籠めた眼差しでユースを見た。ユースはそれを見て、ぶるぶると、今度はあきらかに恐怖の震えを露呈する格好になった。

「ほんとにこんなやつの相手をするなんて、お前も格が下がったもんだな」

トバは眼を細めて、侮るような表情をして見せる。

——格が下がるとか、何を云ってるの？

カレンはトバに対して、反発心を持った。

トバとユースが睨みあっている。原因が自分にあることをカレンは悟っていた。もしかすると、二人とも、あたしのことを好いてる？カレンはそんな思いを抱いて、しかし、心がまったく温かくならないことに気づいて、一種、愕然とした。もしこれがレイトだったら、どんなに嬉しいだろう。レイトが想うただひとりの女性になる。これほど幸せなことはないだろう。なのに、いま、気を持つこともできないような二人があたしのことでいがみ合って、喧嘩までしようとしている——。

カレンは肩をすくめる。

「僕が最初に誘ったんだからな」ユースは弱々しく告げる。

「最初とか、そんなの関係あるか、そういうのはカレンに決めて貰えばいいだろう？」

「そんなことってあるかよ」

カレンは頭を抱えたくなった。

「ちょっと……」と彼女は声をかける。

「なに？」とユース。

「どうしたんだよ」トバも云う。

「二人が喧嘩するなら、もう帰るけど――」

「そんな、トバが一方的にケチをつけてきたんだよ」

「なんだ、俺のせいにするのか？」

二人はカレンを置いて、また意地の張り合いを続ける様子だった。
「もういい。あたし、帰るから！」

カレンはそう云うと、踵を返してその場を去る。

二人はその様子を見ながら、お前がわるい、いや、お前だ、という争いを続け、やがて取っ組み合いの喧嘩になった。

？

一方のカレン。

カレンは落ちついて考えていた。

あの二人に対して特別な感情を持つことなんてあるだろうか、と。もしかしたら、そういうこともあるかもしれないけど、でも、それなら、あたしはいつたい、そのとき、レイトに対してどんな感情を持つだろう？

レイトのことを一途に思うことこそ、自分の本心に適うものと思える。他の男のことを想うなんて、いまの自分にはありえない。

カレンは家に入り、母に「ただいま」と告げたまま、台所にいる彼女に最前買い求めた焼き菓子をプレゼントした。そしてそのまま、自分の部屋に引っ込んで、ユースとトバのことで頭を悩ませた。やがて思いが千々に乱れ、カレンはベッドに横になって枕に顔をうずめた。

トバは何がしたかったんだろう。

別にユースと一緒に時間を過ごしてもいいだろうに、何をむきになってあんなことを云ったのか――。

妬いてるんだろうか。

しかしカレンは自分がそれほど魅力的な女性であるとは認めていなかった。あくまで自分のなかではそれを認める方向ではなかったものの、外から見れば、やはりカレンは魅力的な女性であるというのが大方の認識であった。もちろん、カレンはそのことを知らない。「でも、あんなこととして本当によかったのかな……」

カレンはユースについて行くと云っておきながら、邪魔者が現われたからといって即座に前言を撤回して帰ってきたのである。ユースに対して誠実でなかったとの気持ちを抱く。ユースにしてみれば、これほどショックなこともないだろう。カレンは、なぜ最初に誘われたときにきっぱり断らなかったんだろうと思った。

「レイト……」カレンは愛しの君の名を口にする。

それだけでなにか関係を持つことができたような気がして、身体が芯のほうからぽーっとしてくるのを感じた。レイトはこれからも昇進を重ね、自分とは無縁の世界で大きく羽ばたいて行くんだろう――カレンはそう考えて、自分の瞼が熱くなるのを感じた。

顔にあたる枕が湿り気を帯びてくる。

涙のせいだった。

「レイト……レイト……」

熱にうかされた子供のように、カレンはその名を口にしつつけた。そのとき部屋がノックされた。

「カレン……ちよつといい？」母親のロンダだった。

カレンは顔をあげると、目をこすり、涙を拭きとった。

「どうしたの？」

部屋の扉を開けたロンダにカレンは問いかけた。

「玄関にユースちゃんが来てて、カレンに会わせてほしいって云ってるんだけど……。何をしたのか頬を腫らしてたわよ」

カレンは嫌悪の表情を見せた。

「いまは出たくないって云っというて」

「それでいいの？」

「ええ、いいわ。でないと、ユースも勘違いしちゃうだろうし……」
「まあ」ロンダは肩をすくめて、娘の方を見た。

——強情だと思われたかしら？ とカレンは思い、すまなそうに、様子を窺うように、母の方を見た。

「じゃあ、そう伝えとくわね」

ロンダは溜息をついた。

「うん、よろしく」とカレン。

「でも、あまり隙を見せるものじゃないわよ」ロンダは去り際に声をかけた。

「わかってる」

カレンは声をくぐもらせて云う。

ロンダが扉を閉め、玄関の方へ向かうのを聴き、カレンは、どうしたものか、と考えた。

——いまから何をしたものか……。

改めて考える。

しばらくしてカレンは階下に降りた。

しばらくたてのミルクがあるから、それと一緒に、買って来た焼き菓子を食べようということに一決した。カレンはそれに同意し、ひとり二個食べて、残りの二個は父の分としてとっておこうということになった。

それはウズラの身体くらいのお菓子だった。

食べてみるとふわふわでやさしい食感だった。

口に入れて、甘い香りを鼻孔に感じながら、ミルクで流し込む。

それは至福の一時であった。

？

レイトと話すことさえできないなんて……。カレンは焦がれる気持を抑えられそうになかった。といっても、何ができると云うこ

ともなく、彼女はひとり悶々ときを過ごすしかできないのである。カレンの中にレイトを思う気持ちが芽生えたのはいつであるか、それははっきりとしない。物ごころつく前からレイトとは一緒に遊んでいたし、また、トバとも遊んでいた記憶がある。ユースはちょっと事情が違っていて、彼は父親の仕事の都合でこの街に移り住んで来て、途中から一緒になったのである。その点ではトバの方が、カレンとの関係は長いのである。が、子供の頃はよく一緒に遊んでいたトバが離れていったのは、丁度、自分たち子供が性の問題をとらえはじめるようになったころだった。その点ではもしかすると、トバはその頃から、カレンを異性として意識していたのかもしれない。が、もちろん、カレンはそんなことはいまも気づいていない。ユースはその点、温厚というか、温順というか、確かに自分のなかに男性性を感じていて、カレンにも異性を感じていたかもしれないが、トバほどの拒否反応を見せることはなかったし、それがまた、そうでないトバにとっては許しがたいことに思えるのだろう。それによって、二人の仲は良好とはとても云えない状態になっているのだった。

カレンの周りには都合、三人の男性がいることになる。それ以外の同年代の男女も、それぞれに想い人があって、さまざまなドラマを作り上げている。カレンは気持ちが鬱々しそうなので、外へ出て、他の友人と遊ぶことに決めた。彼女ははじめに、ルーテのところへ向かった。

「ルーテ、いる？」と玄関をノックして扉をあけると、すぐにその母親が出てきた。

彼女は云った。「ルーテはいまリックのところへ行ってるのよ、ごめんなさいね」

リックというのはルーテとともに仲のいい男の子で、二人は付き合っているとの噂が近所の子供たちの間で囁かれていた。ルーテ：「あなたもそうなのね、とカレンは気落ちする。

「ありがとうございます」と告げると、カレンはルーテの家を後

にした。

扉が閉まって、後ろを振り向き、五歩ほど歩いてからまた振り向く。

見上げると、ルーテの部屋の窓にはカーテンが引かれていた。ルーテとあの部屋でいろいろ話したかったのに、とカレンは考える。

とはいえ、そんなことを思ってみても、いないものは仕方ない。カレンは気を取り直して、次の家に行くことにする。次の家でも、その次の家でも、ある家では彼女が忙しくしているからとか、またある家では、いま使いに出しているから当分戻らないとか、そんなことを云われたりした。

みんなつれないな……とカレンは考え、そして、最後に街外れのメリッサのところへ行くことにした。彼女なら、大丈夫かな、いや、また断られるかな、とどきどきしながら訊ねていくと、彼女は部屋にひとりでいて、読書をしているとのことだった。

家の人に迎えられ、入って頂戴と云われて、カレンは機嫌を良くした。そして、メリッサの部屋に向かい、部屋をノックする。

「メリッサ、カレンよ。入っても良い？」とカレンは訊ねる。

「はいはい、どうぞー」とメリッサの明るい声が飛ぶ。

その声に導かれてカレンが部屋の扉をあけると、メリッサがベッドに寝転びながら、読んでいた本を閉じるのがほぼ同時だった。

「よかった、メリッサはいてくれた！」カレンは感動したように口許に両手を当てた。油断すれば、涙まで流してしまいそうだった。

もちろん、ここまでに数人の女の子の家に行って、すべてすげない対応を取られていたので、そのために、心細くなっていたと云うことはあった。それで普段は寄りつかない、街外れまで来て、メリッサの家の扉を叩いたのだが、彼女の居てくれたことと、常とかわらない落ちついた様子の彼女を見たことで、心に安堵を覚えたと云うのが正直なところだった。安堵感は温かさとなって、冷えた心を包んでくれる。彼女は嬉しかった。ただ単純に嬉しかった。

「どうしたの？ カレンが来るなんて、珍しいじゃない？」メリッサが云う。

「ああ、うん。ちょっと他に誰も捕まらなくて、とうとうここまで来ちゃったの」

「人の家を地獄の一丁目みたいに云わないでよ」彼女はくすくす笑った。

カレンには彼女のその笑顔も嬉しかった。「ああ、うん、ごめんごめん」

「で、今日の用事は？」

「うん、ちょっと相談にのってもらおうと思ってね」

「相談？」

「うん」

「ならさ、公園に行かない？ ちょっと市街の方になるから、カレンには後戻りすることになるかもしれないけど、でも、そこで話した方がいいような気がする。家にいると気分が鬱々しちゃうからさ……」

「そうね」カレンは同意する。

二人で連れだって歩くのは久しぶりだった。もしかすると、一年ぶりかもしれない。もともとメリッサの家は遠く離れているため、なかなか足を向けるのが難しいことと、また、学校でも、彼女はひとり静かに本を読んでいることが多いので話しかけづらいということとがあり、カレンとしてはできるだけ話題の合いそうな、明るめの子とばかり話す傾向にあった。しかし相談事にはそういう明るめの女の子よりも、ひとつのことを熟考してくれるメリッサのような女の子の方が合っているとカレンも思っていた。

「メリッサ……」とカレンは表情を曇らせながら云う。

「どうしたの？」メリッサはやさしく云う。まるでメリッサのほうは何年も年上の女性であるような雰囲気放つが、彼女たちは同年である。

「あのさ……」

「うん」

「二人の男の子に同時に言い寄られたら、メリッサならどうする？」
カレンは思いきって現在直面している事態を説明し始めた。

カレンは堰を切ったように話し始め、メリッサはそれにときどき同意の頷きを加えながら話を聴いていた。

「つまり、いま二人の男の子の間で気持ちが揺れてるのね」メリッサは云う。

「そうじゃないの」

「うん？」

「あたしが本当に好きなのは、騎士のレイトなの……」

「まあ……」メリッサは眼を輝かせた。

彼女はそのままにか考えこむ風に視線を伏せて、そしてしばらくしたあとでカレンを見た。

「カレン……現実的に考えて、騎士様とうまくいくとは思えないわ。それなら、その二人の男の子のうちどちらかとうまく行くことを考えた方が現実的じゃないかしら？」

「現実的？ そんなもので人生を決めちゃっていいのかな？」

「気に入らなかったら、そこでまた考えればいいじゃない」

そんなことを語らいながら二人は公園にたどりつき、そこに設置されているベンチに腰を下ろす。風が吹きはじめていた。公園の樹々が梢を揺らして、ベンチの下の地面にも木漏れ日が斑になって踊っている。

公園には他にも人々の姿があった。

そこへ無然とした表情のトバがやってきた。

「お、カレンじゃないか」とトバは云う。

「トバ……」

「うん？」メリッサは事情を察した。「カレン、もしかして……」

「そう、二人のうちの一人がトバよ」

「まあ……」メリッサは手で口許を抑えた。

メリッサもまさか相手がトバだとは思っていなかったようだ。ト

バは強情者で通っていて、いつもまわりに威張り散らしたり、思いやりのないことをしたりして、子供たちの中でもいわば嫌われ者の部類に入っていたのである。

「ちょっと、いまあたしたち話してるんだから、向こうへ行つてよ」とカレンがむきになって云う。

「そんなこと云うなよ」とトバ。「俺と一緒に来いって」

トバはゆっくり近づいてくると、カレンの腕をとって引き上げようとした。

「ちょっと、やめてったら」カレンはむきになって云う。それは公園にいる人たち全員に聞こえそうな声だった。

皆が注目する。

そのときである。

「やめろよ、嫌がつてるだろう？」聴き憶えのある声が飛ぶ。それはユースの声だった。

「なんだと？」トバはむきになってぐいと顎をそびやかして振り向いた。

？

トバがすごい形相で振り向くのと同時に、カレンたち二人もユースの方を振り向いた。しかしそこには常のかれではない、まったく違った様子のかれが立っていた。

カレンは驚いた。

普段気弱そうなユースがどうしてこんなに毅然とした態度で、自分より一回りも二回りも大きな体格をしたトバに対することが出来るのだろうか。

「まさか、もしかして、そういうこと？」メリッサは事の急展開に驚きながらも、カレンの耳元に口を寄せて、期待の籠った口調で訊ねた。

「ええ、つまり、そういうことなの……」カレンはこの場でも氣のないそぶり、ぼそつと友人に答えた。

「んー、そういうことか……」メリッサは小声で呟いた。

「お前、ひよろっちいくせに、なに生意気なこと云ってんだ？」トバはむきになって云った。

カレンはトバの顔とユースの顔を交互に見たが、そのとき、ユースの左の頬に青あざができているのを見つけた。あのパレードがあった日から四日、たぶん、あの日の争いでトバにつけられた傷なんだろう……と彼女がそんなことを考えていると、それを肯うようにユースが発言した。

「トバ、今日は許さない。いつもいつも自分のわがままが通ると思うなよ」

「ほう、云ってくれるね。許さないだって？ いったいどうするっていうんだ？ そんな非力な腕で、何ができる？」トバは上向き加減になって顎をそびやかし、侮るような様子を見せる。

ユースはそれにかちんときたのか、利き腕である右拳を握りしめると、トバにうちかかっていった。

「きゃっ！」とメリッサが声をあげた。

メリッサの反応こそ、女の子のあるべき姿と云うか、それこそ普通の反応であろうに、カレンときたら、冷めた視線を二人の少年の上に送っていた。

ユースはトバにうちかかったが、トバは相手の大きく振りかぶった拳を左の腕で防いで、自然な動きのなかで右拳を握りしめてユースの顔にパンチを食らわせた。普段のユースならこれで意気粗相してしまうところだった。が、今日のかれは違った。ユースは徹底抗戦の構えを崩さない。

カレンはそのとき、なにか重たいものがずしりと心にぶらさがるのを感じた。が、その重さが何であるのかわからない。

ユースはじろつとトバを睨みつける。その視線は狩りの獲物を狙う視線だった。

「その目つきはなんだあ？」トバは語尾を大きく震わせて云った。それは相手に声量で威圧を掛けようとして意図したものだったが、いまのユースにはまったく効かない。

ユースは殴られた頬をまったく気にせず、拳をでたらめに振りまわす。「カレンに謝れ！」かれはそれだけを叫んで、攻撃の手を緩めない。

攻撃を食らっている数はあきらかにユースの方が多いが、次第に、トバもちらほら攻撃を食らうようになっていた。

カレンは心に熱さを感じていた。これまでに感じたことのない高揚感だった。たしかにレイトのことは好きだ。それは間違いない。しかし、レイトでなくても、自分のために拳を揮ってくれる人がいるんだということに驚きを隠せなかった。しかもそれが普段は気弱そうで、また頼りになりそうにないユースが、実は心の底に熱いものを持っていて、いま必死になって自分に危害を加えようとする人物を懲らしめるべく尽力している。自分が心を感じている熱さは、きっとこのユースの心の熱さが伝播したものだろう……。カレンは初めこそ気乗りしなかった二人の男性の争いだったけれど、次第に、メリッサとは違う形で心が躍動してきた。

そしてまた、あれほど殴られても何度も立ち向かっていくユースを見て、次第に、かれの身体の心配をしている自分の気持ちに驚かされた。

「しぶといな」とトバは余裕を見せているが、かれはすでに唇を切って下顎に血が流れていた。

対するユースも鼻血を出し、腫れた左目蓋が本来眼のある位置まで垂れ下がっていた。見るも無惨な状態である。

トバが大きく踏み込んでユースにさらに攻撃を加えようとしたときである。

そのときカレンは内心から突き上げてくる衝動に正直になった。

「もうやめて！」カレンはユースとトバの間に入って手をあげ、立ちふさがった。

トバはびくりとして身体を反応させたが、振りかぶった拳の動きを抑えることはできなかった。ぐんと腕が伸びて、カレンのこめかみの脇を拳がすりぬける。しかし完全には逸れずに、カレンのこめかみのあたりからすーっと鮮血が頬を伝って流れおちた。

カレンは普段経験しない痛みに愕然となった。

彼女はその場にへたりこんだ。

「あ、ああ……うう」トバはユースにはあれほど平然と拳を加えておきながら、カレンに加えた一撃に身体を震わせた。弁解の言葉も出ない様子だった。「ああ、俺は知らねえ。お前らが悪いんだからな」トバはそう云うとその場をふらふらしながら走り去って行った。カレンは顫えていた。ユースの前に身を投げ出してから、トバに攻撃を食らうまでほんのゼロコンマ数秒。そのなかで感じた恐怖と、いまこめかみに感じている痛みが彼女には恐ろしかった。そしてこの何倍もの恐怖と痛みに耐えて立ち向かったユースの勇氣に、カレンは改めて気づかされた。

——そうよ、ユース……ユースは？

と思つてカレンはわれに返り後ろを振り返った。

ユースは震えていた。

戦いが終わったことも気づいていないかのように、拳を震わせ、顔を震わせ、身体を震わせていた。

「ユース……」カレンは満身創痍のユースに声をかけた。

「ああ、うん」とユース。

「ありがとう……」カレンは自分のために戦ってくれた戦士に礼を述べた。

「カレン、ごめん、きみに傷を負わせるなんて……ぼくの力が足りないばかりに」

カレンはその言葉にせつなさを覚えた。

そしてそこには、不思議と、幾分かの喜びもまじっているようだった。

カレンはくすつと笑う。

「痛めつけられたね……」

「うん」ユースは云う。

「あたしのためにごめんね」カレンは自分の心が素直になって行くのを感じた。

「これは半ば自分のためでもあったんだよ、だから気にしないで」そんな台詞を吐くユースに、カレンには彼が大人である印象を受ける。自分のため……それはどういう意味だろう？　しかしカレンはその言葉の意味がわかる気がして、それ以上、問わなかった。

「じゃあ、ぼくはもう行くよ。きみに嫌われてるみたいだしね」

その言葉はカレンの胸に突き刺さった。

ユースは折角誘ったのに立ち去ってしまったカレンのことを、四日前のことを云っているのだとわかった。

「ち、ちがうの！」とカレンは立ち去りかけたユースの背中に向かって云った。

ユースは足を止めて振り向いた。その顔には驚きの表情が張りついていた。「違う？　なにが違うの？」

カレンは言葉が出なかった。が、今を逃せば、これっきりユースとは対等に話をする事ができない気がした。

「あたしはあなたのことを誤解してたわ。ユース、ごめんなさい。あなたを侮ってた。その心の元はトバと同じだったかもしれない。でもあなたを見なおした。現金な女だっと思うかもしれないけど、あたしはあなたの中に勇気を見出した。やるときはやる人だって、わかったの。ごめんなさい。あたしは何も見てなかったのね。いつも夢見がちののぼせた頭で、現実を見てなかったのかもしれない。ねえ、ユース、これからあたしと一緒に遊んでくれるかしら？　だめだったらだめって云って頂戴」それがカレンの云える精いっぱいだった。

ユースは固まっていた。その言葉の意味を吟味している様子だった。

そのとき、これまで何も云わなかったメリッサが云った。

「このまま二人、付き合っちゃえばいいじゃない。それが一番よ。既成事実を作ったら、トバだって誰だって、もうケチつけてきたりしないんだからさ。ねえ、どう？ お似合いだと思うんだけど。で、カレン、夢見る少女はここらへんで卒業ってことでいいんじゃない？ あたし的にはここで大団円を迎えて、みんな幸せに暮らしましたとさ、って行きたいんだけど」

メリッサはそう云うと、肩をすくめた。

カレンはユースを見た。

ユースもカレンを見た。

二人は照れたように頬を染め、そして仲直りの握手をしてから近くのベンチに座った。

メリッサは二人の治療のために救急セットを持ってくるからと云って、その場をあとにした。どのタイミングでそれらを持ってくるかが彼女に課せられた難題であったけれども――。

春の日はうらうらと、罪もなく、地上に柔らかな光を降り注いでいた。

【憧れと友情・了】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0938u/>

憧れと友情

2011年6月15日03時40分発行